

アーネスト・サトウと明治維新

93E017 伊比和歌子

アーネスト・サトウは、1862(文久2)年に日本駐在の通訳として任命された。そして、幕末から明治維新へかけての激動の時代を過ごすのである。私は、彼の『一外交官の見た明治維新』(岩波文庫、上・下)を読んで授業で習ったことがいかに上っ面のものであるのか知った。何年にどういう事件が起こってどういう条約が結ばれ、どんな内容の法律が出来たのか、ということは知っているがそれだけである。ただのデータにすぎない。しかし、それが生臭い血の匂いと共に現実のものとして生き生きと私の目の前によみがってきた。一般にサトウの名はほとんど知られていないだろう。今、私はそのことを非常に残念に思う。もっとも、終戦前は当時の為政者によって、禁書として扱われてきたそうだから、仕方ないことかもしれない。それほど彼は日本の運命を左右した事件に直接関係していたのである。

サトウの「異文化体験」は一体どのようなものだったのだろうか。この場合の「異文化」とは日本文化のことである。第三者の目にどう映ってみえたのかを知るのには興味深いことだ。しかし、その前にサトウの人柄について触れてみたい。私が思うに彼はバランス感覚の優れた人である。公正公明であるとも言おうか、彼は、日本人と外国人がいさかいを起こした場合に、感情的になって、一方的に日本人が悪いと決めつけるようなことはしなかった。彼がこういう資質の持ち主であることを示すある出来事を紹介してみよう。

サトウが日本に着任したのは、1858(安政5)年に修好通商条約によって外国貿易の港が開かれてから三年たった頃だった。幕府はその力を失いつつあり、また尊皇攘夷論者による外国人の暗殺が頻繁に起こり、非常に不安定な時期であった。実際、彼が到着してから一週間もたないうちに、あの有名な生麦事件が起こるのである。彼はこの時のことを回顧して、上司であった代理公使のニール大佐は最上の方策をとったものと思う、と言っている。そして、周囲の人々が口々に自分の考えを述べて、興奮している間も、彼は冷静な気持ちで勉強していた。そういう自分を、「他の人々を残らず殺気だたせたような憤激の情は、私にはおいて来なかったのだ。私は、自分に同情心の足りないことを、心ひそかに恥もした」⁽¹⁾と責めてもいる。しかし、そんなことは決してない。なかなか持てない希有な才能である。

さて、もうひとつ、彼は大変好奇心が旺盛であった。どんな事でも取りあえず試した。彼は通訳であったが、日本語だけでなく、礼儀作法や習慣、食べ物に至るまであらゆることに興味を持った。また、見知らぬ土地を旅行することを好んだ。そして、大いに楽しんだ。「異文化」に接するとき、楽しむことはとても大切である。怖がったり、拒絶したりすると、真の姿はなかなか見えてこない。その点、サトウは持ち前の好奇心と、決して最後まで諦めない熱心さでもって日本文化を体験していく。ある時、彼は劇場へ行き、舞台の前面に近い土間に席を取った。この頃、外国人は役者のせりふが全く聞き取れないほど舞台から遠い席で観なければいけなかった。しかし、彼は頑として席を離れなかったのでとうとう興行者のほうで折れてしまっ

た。外国人が日本語を使って議論に勝ってしまったのである。こんな面白いことはない。また、大坂で外国の外交代表たちと将軍(徳川慶喜)の引見のあと、サトウは友人のワーグマン(画家)と共に陸路、東海道を通して、江戸へ帰ったことがあった。条約が改正されたり、政治状況が変わってきたりして、外国人が移動できる範囲が拡大したとはいえ、あいかわらず外人を狙う輩がまだまだいたところである。そして、事実、掛川で凶徒に襲われている。しかし、彼としてはそういう危険を省みても未知の世界を見たいという己の欲求には勝てなかったのだろう。また、「どんな地図で細心に研究しようとしても、徒歩で実地に研究するにまさる地理学の勉強法はない。また、歴史の研究者に対しては、戦争のいろいろな変遷をも理解させてくれる」⁽²⁾という考えをもち、それを実践しているのである。

さて、彼はこの旅の様子を、駕籠の説明から旅籠での接待の仕方まで、事細かく、かつおもしろおかしく描いているのだが、私はあることに気づいた。サトウが驚きや戸惑いをもって経験している「異文化」は、私たち、現代の日本人にとっても「異文化」であることに。「江戸」という時代の日常は、もはや、時代劇の中でしか見ることは出来ない。こんなにも短期間のうちに生活様式が変わってしまった民族がいるだろうか。

このようにして、サトウは日本の言語、歴史、宗教、風俗と多岐にわたって通ずるようになる。そして、通訳官から、書記官へと進み、オールcock公使やパークス公使の秘書として、また片腕として、日本国内を縦横に活躍するのである。それはまた、鹿児島湾に砲火を交えた薩英戦争、長州と四国連合艦隊の下関戦争といった大事件の当事者となることでもあった。と、同時に、後の日本を代表する人々と親しくなっていく。伊藤博文、井上薫、西郷隆盛等々、錚々たるメンバーである。これらの人々に対する私の印象は、歴史上の大人物というものでしかなく、ゆえに、生身の人間とは程遠い。しかし、サトウの出会った彼らは、海外の事情を広く知りたいたいという願望をもち、古い政治体制を打ち壊そうという野心に燃えている若い下級の武士達だったのだ。

伊藤、井上の両名と知り合ったのは、下関海峡へ外国艦隊を派遣しようとしていた、まさにその時だった。二人は過去にイギリス公使館を焼いたこともあったのだが、その後、ひそかにイギリスへ派遣され、列強国の文明を学んだのである。そして、長州藩主へ和平を説くために(結局は失敗に終わるのだが)、急ぎよ帰国した。

「薩摩人にせよ、長州人にせよ、我々の行為に対して何ら恨みを抱く様子もなく、そのころから引き続いて生じた憂乱と革命の幾年月の間、常に、われわれの最も親しい盟友であったという事実は、すくなく注目値する」⁽³⁾とあるように、その後は何かにつけて深い関わりを持つようになる。例えば、兵庫で西郷と会ったときには、直接、徳川慶喜が一昨日に将軍職を拜命したことを聞き出した。このころには、サトウの名は日本語を正確に話せるイギリス人として知れ渡っていたし、ジャパン・タイムズに寄稿していた諸論文が『英国策論』というタイトルで出版されていた。こういう事からも日本人の信頼を得るようになっていたのだろう。西郷のことを、「この人物は甚だ感じが鈍そうで、一向に話をしようとはせず、私もいささか持て余した。しかし、黒ダイヤのように光る大きな目玉をしているが、しゃべるときの微笑には何とも言い知れぬ親しみがあった」⁽⁴⁾と評しており、なかなか的を得ていると思う。サトウはまた、薩摩、長州といった反幕府派の人々ばかりでなく、一方では将軍派であった勝海舟とも親交を深めている。イギリスは勝から様々な情報を入手していた。そのため、フランスのロッシュ公使が将軍に再挙を勧告したことなども知ることができたのである。

こうして、サトウの交友関係や関わってきた事件を知るうちに、幕末の人々が何を思いながら行動してきたのかが、はっきりとみえてきた。私は今まで、日本が長い鎖国を止めて開国に踏み切ったのは、外国の列強国に武力によって半ばむりやり、というか仕方なしに、だったのだらうと考えていた。しかしながら、それは、大きな過ちだったのだ。革命は起こるべくして起こったのである。フランス革命しかり、アメリカ独立戦争しかり、若く、そして下級の人々の力と熱意がその源にある。

この激動の時代にサトウの果たした役割とは何だったのであろうか。日本とイギリス、あるいは倒幕派と將軍派といった大きな機械を上手く動かす潤滑油であったり、また、縁の下の力持ちというだけではないだろう。彼は新しい時代に向けて、ふくれあがる風船をひとつきする針の一本であったに違いない。

註

- (1) アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』坂田精一訳、岩波文庫、1987年、64頁。
- (2) 同上262頁。
- (3) 同上159頁。
- (4) 同上226頁。